

大学における教養教育を考える（その5） —「現代社会と人A・B」の授業実践の検討を通して—

小沢一仁^{*1} 滝沢利直^{*2}

A Review of Liberal Arts Education at a University level through an Omnibus Lecture series “Modern Society and People A & B” (Part 5)

Kazuhito Ozawa^{*1} Toshinao Takizawa^{*2}

The purpose of this paper is to review Liberal Arts Education at a University level through an Omnibus Lecture series “Modern Society and People A & B” which we offer at Tokyo Polytechnic University. Chapter 1 discusses merits of Omnibus Lecture series “Modern Society and People A & B” and its contribution Liberal Arts Education at a University. Chapter 2 discusses that imitation and creativity have complementary relation for human development rather than contradictory relation. The chapter claims that copyright should be for raising a culture. Students found the predecessors' various ideas through the lecture.

はじめに

本論は、大学における教養教育のあるべき姿を、一般教育科目でありオムニバス授業である「現代社会と人A・B」を通して検討することを目的として担当者において授業実践を継続して検討してきている一環にある。まず、この授業の特徴を提示し、そこから大学の教養教育及び授業自体のあり方について考える。続いて、各担当教員によるそれぞれの授業実践を学生の反応を交えて検討していく。

第1章 「現代社会と人A・B」の授業から大学における教養教育のあり方について考える (担当 小沢一仁)

この章では、「現代社会と人A・B」という科目の特徴から、大学における教養教育のあり方を考えていく。その中で、学生における授業を受ける態度についての現状と、その結果としての就職活動状況の困難さを対比してその関連を検討する。さらに、これからの教養教育並びに大学の授業のあり方についての提言を行う。

1. 「現代社会と人A・B」の特徴

この授業の特徴は、次の3点にまとめることができる¹⁾。第一に、各教員がひとつひとつの講義を1回ずつ担当するオムニバスの授業である。それぞれの講義は独立しており完結している。よって、学生は、90分のそれぞれの講義において、完結しまとまった内容の授業を受けることができる。この点で、わかりやすさや理解のしやすさが担当する教員には求められているといえる。第二に、各教員の講義のテーマは、各教員の専門領域と学生が生活する日常生活との交わる領域を設定している。この点で、単なる各専門領域の入門のための授業ではない。学生の日常生活と専門領域との接点をテーマに設定していることは、社会に出て行く学生の視野を広げて深めるための授業を目指しているからである。この点が、大学における教養教育のあり方を考える上で重要な意義を持つといえる。第三に、各教員からの講義の後、毎回学生自らの考えをまとめる文章を書くことである。この文章のテーマは、各教員からそのつど提示される。この文章を書くことは、単なる受け身で、講義を聴くだけでなく、各教員の説明と学生自らの考えとを対比させていく、学生にと

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター准教授 第1章担当

^{*2} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授 第2章担当

っては主体的な思考活動であるということができ
る。

2. 大学の授業における学生の現状

大学の授業における学生の現状について、極端な
言い方ではあるが、三浦展は「カフェ化」という名
称を付けている²⁾。つまり、喫茶店にいるように、
授業中に、飲み食い居眠りし、又は友人と話して
いる状況が見られるのである。このような状態が、一
部の学生ではあるが、見られることはこの「現代社
会と人A・B」の授業でも、他の授業でもあること
を筆者は体験している。その際に、そのつど注意す
るのであるが、根本的な改善には至らないのが現状
である。つまり、モグラたたきのように、大学の授
業における日常的な光景と化しているのである³⁾。
また、最近頻繁に、カフェ化する学生に、メール、
スマートフォンによるネットサーフィン、携帯機器
によるゲームが見られる。そのつど注意をしている
が、モグラたたきと化している。

誤解のないように指摘するが、カフェ化している
のは一部の学生である。当然まじめに授業を聴いて
いる学生もいる。つまり、カフェ化している学生と
まじめに授業を聴いている学生が混在しているの
が、大学の授業における学生の現状であるというこ
とができる¹⁾。なお、様々な大学で授業をした経験
から述べると、まじめに授業を聴く学生とカフェ化
する学生との比率は、大学の偏差値には変わりなく
ほぼ同様であるという印象を持つ。ある程度高い偏
差値にある大学の授業においてもカフェ化現象は
あり、大学の授業において学ぶという点から言えば、
どの大学に入るかということよりも、入った大学で
いかに学ぶかが重要であるといえる。

このような両極端にある学生が混在している現
状の中で興味深いのは、学生の授業評価アンケート
において、数例だが毎回のように書かれてある自由
記述に、「先生が私語をしている学生を注意してく
れたのがよかった」というものがある。つまり、ま
じめに授業を聴いている学生は、カフェ化し私語を
している学生を快く思っていないということであ
る。このことから、大学の授業におけるカフェ化防
止対策は、カフェ化している学生を指導するだけ
なく、まじめに授業を受けている学生にとっての授

業環境を維持するためにも重要なことであるとい
える。

3. 大学の授業をカフェ化する学生の末路の 推測

文字にすると過激な表現であるが、結論から言う
と、昨今の学生の就職難の原因を辿っていくと、授
業をカフェ化することにあると考えられるのであ
る。当然、昨今続く学生の就職難の主たる理由は、
現状の社会における不景気のためである。しかし、
このような不景気の中でも就活において企業から
の内定を数社得る学生もいる。決まらない学生は、
全く決まらないという印象を持つのである。いくら
就職活動で努力しても就職難という壁にぶつかり、
就活をあきらめてアルバイトでフリーターになる
学生もいる。

このような就職活動における両極端の学生の姿
と、授業における両極端の学生の姿という2つの姿
をつなげてみる。1年から3年まで授業をカフェ化
してきた学生が、4年になって就職活動で努力して
も、大学で学んで身につけたものが何もなければ果
たして就職活動で企業側から評価されることがあ
るだろうか。たとえ、要領よく単位を取ったとし
ても、授業中カフェ化した中で学び得るものはある
わけがない。すると、要領の良さだけが就職活動に
おいてアピールできるものとなり、それだけで評価
されることが限りなく難しいのではないか。つまり、
大学の授業をカフェ化してきた学生は、就職活動
をする段階になり、大学で学び得たものがないとい
う問題が顕在化することになる。そして、その末路
として就職難に直面するという結果があるのではな
いかという推測が成り立つのである。

このことから、授業のカフェ化は、就職難の学
生を生み出してしまう危険性をもつ問題であるとい
える。とすると、カフェ化防止対策は、先に述べ
たようにまじめに授業を聴く学生を妨害するとい
う理由と共に、そのカフェ化する学生における4年
次になったときの就職活動に対しても必要なもの
であると考えられるのである。

4. 大学における教養教育の改善を目指して

このようなカフェ化防止対策が就職活動対策につながるという推測は、重要な前提がある。それは、大学の授業が、その学生の専門的知識及び技術の習得に寄与し、社会人としての視野を広め深めるために寄与することである。この前提があつてこそ、カフェ化防止対策は、就職活動対策となりうる。筆者は教養教育を担当している故に、教養教育がその学生が社会人としての視野を広め深めることに寄与することを目指して、授業を行う責任をもつものである。そして、教養教育の目的は、社会人としての視野を広め深めることにあつたと考えられる。

つまり、教養教育をいかに改善していったらいいかを考えることは、学生における、社会人としての視野を広め深めるとは、いかなることかを考えることとなり、単なるカフェ化対策だけでなく、その学生が就職活動をする段階になつてもさらには、社会人として社会の中で生活していく中でも重要なものは何かを考えていくことへとつながっていくと考えられる。

そこで、以下に、大学における教養教育の改善について検討する。まず、先に述べた「現代社会と人A・B」の特徴のうち、専門領域と学生の生活との接点の領域をテーマとすることと、文章を書くことの2点を、教養教育の改善のヒントとして考察する。次に成績評価について考えていく。

5. テーマの設定

大学の一般教育つまり教養教育において、その内容を示すテーマは、幼稚園から小学校、中学校、高校までのように学習指導要領で決められているわけではない。大学における教育方針を鑑みて担当教員がその科目のテーマを設定することができる。教養科目は、かつては人文系、社会系、自然系と区分され、それぞれの学問分野の入門編として設定されていたといえる。それに対して、「現代社会と人A・B」においては、各学問領域と学生が生きる日常生活との接点の領域をテーマとしている。このことは、教養教育においても、取り入れるべきものであると考えられる。筆者は、心理学を専門領域とするので、教養教育としての心理学を考える際に、先に述べた

ように、心理学の入門のための授業ではなく、心理学という学問領域と学生が生きる日常生活との接点をテーマとするように、改善していくということである。つまり、専門教育としての心理学に導いていく入門としての心理学の授業と、心理学という学問療育と日常生活との接点を扱う教養教育としての心理学の授業では、その方向性が異なるということである。

これは、言い換えれば、専門領域と日常生活との接点をどう捉えるか、つまり、アタッチメントをどう捉えるかという問題である。この両者の領域をいかに取り出して、学生が社会の中で生きる上での広く深い視野をもつことに寄与する内容を見つけ出すかという問題であるといえる。

6. 心理学自体を検討し直す課題

このことは、ある程度のことまでは容易にできるが、より根本的に考えると、特に、心理学という学問領域で考えると、相当な困難さを抱える問題である。たとえば、発達心理学という心理学の領域を考えた場合、専門的研究の知見からいくらかでもその成果としての各発達段階の特徴を提示することはできる。それは、各発達段階を生きる、言い換えれば日常生活を生きる各発達段階にある対象からデータを抽出し一般的傾向を明らかにしてきた研究蓄積の成果である。しかし、その研究の成果は、学生が生き生活する世界との接点とはなりにくい。研究の方法論の中で、日常生活はそぎ落とされてしまう傾向にある。では、日常生活に則した研究をすればいいということになるが、すると様々な要因が介入することとなつてしまい、一般化や共通な特徴を取り出すことが今度は困難となり、研究という厳密性を求め誰も納得する共通性を求める公の営みにそぐわなくなってしまうのである。

先に挙げた発達心理学という心理学の一領域においても、各発達段階の特徴を明らかにするという専門的研究は、日常生活との接点を設定すると、たとえば各発達段階における日常生活を生きる子どもや青年さらには大人における自己理解とはいかなるものかというテーマを想定することができる。その自己とは日常生活を生きる自分のことであり、その自分のことを理解することが自己理解である

ということが出来る。この自己理解を扱う際に、心理学という専門領域において自己理解とは何かを検討することが、教養教育を行う背景として根拠として必要となる。心理学という学問の特徴もあるが、自己理解とは何かを専門的研究として追求することは重要であるが、困難なテーマであり、いわば心理学という専門領域の中に、自己理解という一領域を設定することが必要となる課題ともなっていく。すると、単なる専門領域と日常生活の領域のアタッチメント考えるという問題にとどまらずに、心理学という学問を抜本的に検討し直すという作業も課題となっていく問題となるのである。

7. 参加型授業への転換の一案として文章を書くこと

この「現代社会と人A・B」においても毎回の授業で文章を書くことを実施しているが、筆者は先に、大学における授業形態で、参加型授業についてコミュニケーションを行うことと、自己理解を目指し文章を書くことについて検討している³⁾。さらに、自己理解を目指し文章を書くことを授業に取り入れた効果について検討している⁴⁾。この文章を書くという作業は、学生に主体的に思考を行いさらには、授業に参加することにおいても意義があるものである。

この点についての問題を考えると、これまで文章を書く際には、授業内容のテーマに照らして自分自身を振り返るように指導してきたが、全く授業を聴かなくても利いた風な内容を書いてしまう学生が目につくようになったことである。具体的には、授業中寝ている学生を注意してもまた寝てしまう。その学生が文章を書く時間になってやおろ起き上がって、全く授業の内容とは異なる自分の思いつきの内容を文章としてしまうという様子が見受けられるのである。また、授業内容を聴いていたとしても中途半端にしか理解しておらず、授業内容を無視して、テーマに関わる自分の感想を書いてしまう学生も見られる。これでは、授業内容は全く無駄になってしまうのである。

よって、授業内容についてワークシートにして、そのつど内容を記入させる方法や、授業の初めにまず文章には授業の内容を整理して文章にして書く

ようにさせる方法も考えられる。特に学力や思考力さらに意欲に難のある学生の場合、授業内容を理解することに向けてどうやって指導するかという問題に直面する。その際に、まずは、授業内容を文章にして自分で捉えて書かせることが必要であると考えられる。その上で、自分の意見や思いを書かせるといった段階にすすむのである。

8. 成績評価の適正化

先に示したように授業をカフェ化する学生の末路を就職難として捉えると、現実の壁に突き当たり学生自身が大学で学ぶことの意義を自覚するためには、成績評価を適正化する必要があると考えられる。これは、教員の設定した学習目標に到達しない学生に対しては不可とするという厳格化といえる。学生の中でいわれる通称「楽勝科目」では、何を授業で身につけられなかった学生を生み出してしまいう危険があるということである。

この成績の適正化、厳格化は、授業が始まる前に学生に周知させる必要があるだろう。そして、授業自体が楽はできないものであることを意識させ自覚させることから始める必要がある。そうでないと、学生はお客様意識を發揮して、こんなはずではないと思った、授業を聴いてなくても成績は取れると思った、高校までは出席しているだけで点数となった、この授業は出席さえすれば単位を取れると聞いていた、面白くもない授業をする先生が悪い、等々のクレームが噴出する結果となってしまう危険がある。

さらに、この成績評価の適正化、厳格化は、先に述べたようなテーマの設定において、各専門領域と日常生活の接点を提示し、教養教育として、将来学生が社会人として生きる視野を広め深めることを目指す授業を展開していくことと両輪であるといえるだろう。

以上、「現代社会と人A・B」を通して大学における教養教育についてその改善を考察した。大学教育も現代社会の流れの中で変容を余儀なくされている。その中で、日々の授業を検討しながら、本論で検討した点を実施していき、よりよい教育を目指していきたい。

第2章 模倣と創造性

(担当：滝沢利直)

1. はじめに

本授業は「模倣と創造性」の関係について考察する授業である。両者は対立する関係にあるのか、それとも相補的關係にあるのか。最近ではこのことと関わって著作権の理解やコピーペーストの行為の問題等が議論されている。学生たちもこれらについて一定の良識や規範性をもっている。本学での様々な授業を通してこれらが教育されている。このような状況において、本講義では改めて両者の関係について問い直したものである。

「創造」という出来事には、向上性や発展性、更新性、生産性、先取性、或いは推進力という肯定性の価値を内側に潜めていると考えられる。したがって、閉塞した社会においては、この「創造」という現象が、なんらかの解放のきっかけを与えてくれると期待される。創造力の基盤がしっかりしている世の中での「創造」という出来事は、様々な停滞を打破してくれるものと期待されるのだ。そこには、未来への可能性を感じるものがある。

閉塞性が漂う今日において、しかし、性急に「創造」「創造」と脅迫的に言い募っていても、創造の出来事はあまり生まれないということもあり得る。成果主義の狭い視野で理解して収束してしまうということもあるのではないか。その人なりに歴史的・社会的な生活経験の過程で、或る必然性をもって追求した結果として創造性と言われる価値が出現するという側面も認識していく必要があるのではないか。

だからこの問いかけにおいては「創造」とは、単なる突飛さとか異質的独自性として把握するのではなく、むしろ人間の営みにおける受容性や有限性、共同性、模倣性という角度からの豊かな意義が示されるのではないかと思われる。そこで本講義では、「模倣」と「創造性」の関係について特に焦点を当てて考えた。

2. 講義内容

まずJ. デューイの模倣論を伝えた。彼は、模倣という概念が間違っ

て流通しているという。模倣は、人間の学びという経験においては「共同生活における社会的配慮」として見出される理性的なものであるという。共同という全体的状況において、模倣とは本来活動の手段として他者の行動を真似るのである。これは理知的な働きであるという。一方、結果や外的に強要された目的への同一化としての模倣は理知的ではない。真によき社会的統制のはたらく状況では、この共同活動に有効に参加できるように人間は理知的になる。この参加活動での模倣とは手段を真似るのであるが、そこでは「まなぶ」ことが成立していると言う。そしてデューイは模倣できる力を、人間独自の依存性と可塑性という可能性を持っていることの証として評価している。社会的配慮とはこの力と相関している。したがって、「まなぶ」ことが終了することは、意固地であり、他者との相互作用も偏頗となるので、そこには豊かな模倣はない、とみる。すなわち人間の成長はないと言う¹⁾。依存するから自立する。依存とは豊かな社会的配慮としての模倣のことである。人間の創造性は、このような模倣という共同活動においてこそ育つという考えであると学生に伝えた。「よい模倣」とは手段を真似ることであり、「悪い模倣」とは結果や成果だけを局所的に真似ることである、と伝えた。

次に教育学者上田薫の個性論「なにを個性的というか」について講義した。他者との差異を突飛な形で表現したものが創造ではないという上田の考えの背景には、その人間とのバランスがとれているかどうかが個性的であることの基本条件であるという考えがある。その全体性がその人らしく充実しているかどうかが要点だ。個性的な必然性を自分の中で深くためていく過程を重視することを主張していることを伝えた²⁾。

次には、宮大工小川三夫の模倣について講義した。小川は、大工は勘を育てなければならないという。そしてこの「勘をどうやって養うかっていったら、自分の師匠から写し取るしかないんだ」³⁾と述べている。彼もまた共同活動の修行における模倣の特性を明示してくれている。

続いて次に山田奨治『オリジナリティとは何か 日本文化の模倣と創造』を活用して独創神話への批判、および模倣を楽しむことによる再創造の大切さを主張していることを紹介した。山田は、似たものを発見する能力は、幼いころから人間にそなわって

いる。似たものを発見する能力は、違うものを発見する能力と表裏一体である。人間がことばを獲得していく過程では、或る概念を理解することと、対象を他のものから差異化することが同時進行で起こる。そして、認識の過程で差異化されなかったものが似たものである、と指摘している⁴⁾。ということは、大人・教師も、諸実践において似たものを受容し行動の妥当性を識別していくことが大切ということだ。芸道には「守・破・離」というものがあるとよく言われていることだ。そして山田の解釈は、『守』はひたすら『形』をまねる時期、『破』は『形』をわがものとした後に独自の工夫をする時期、『離』は『形』を離れて『型』を完成させる時期だといってよいだろう。『破』の段階で目指されるものが個性だともいえるが、それは現代風の『何でもあり』な個性ではなく、『形』を崩すことなく加えられる微細な創造性である。それを指すことばに『風』がある⁵⁾ というものだ。

次に、教師の成熟過程における模倣と創造について語った。教育学者佐藤学は、教師の「居方」というものを観察して、優れたベテラン教師のポジションは絶妙と言うほかないと結論を出している。教育実習生や若い教師の授業を観察すると、「居方」を習得した者はほとんどいない。一方的に話し続ける授業でありつながりが切れてしまう。しかし、教室において教師は、子ども（生徒）たちの中へ入ろうとする「居方」ではなく、教室の子ども（生徒）全員を自分の身体イメージの中へ入れ込む「居方」で立たなければならない⁶⁾。この「居方」は、先輩教師からの真似るといふ模倣から形成されていくという。今の学校現場には、果たしてこのような共同的な活動（修行・研修）が教師同士の同僚性において行えるゆとり・条件は揃っているかどうかを本学学生にも問うてみた。

最後に山田奨治が、デジタルコンテンツの制作にはその黎明期からかかわってきた経験から、著作権について考えていることを紹介した。「この仕事をはじめてすぐにわかったことは、著作権が問題になってできないことが、あまりに多いということだった。コンテンツ制作にたずさわっているひとならば、みな似たような実感を持っているだろう。著作権についてのいまの論議では、著作者の利益を守ることばかりが強調されている。わたしたちが守るべきも

のは、人類の文化であって、一部の権利者の利益ではないはずだ。このままでは、わたしたちの文化が窒息してしまうかもしれない— わたしは本気でそう思っている⁷⁾」と、山田は言う。

以上、模倣と創造をめぐる多様な考え方と人間の活動の多様な諸相を紹介した。

学生による課題レポート作成では、「模倣と創造性は対立するものか」というテーマを課して、受講者各自の考えを述べてもらった。

3. 学生のレポート

* 建築学科1年女子の課題レポート：【まず結論から先に述べると、「創造性」とは「模倣」から発生するものだと私は思う。なぜなら、何かを「創ろう」とすることは、まず「真似する」ことから始まると考えるからだ。例えば、私は絵を描くのが幼少期から好きだったが、自分で覚えている限り、私の「お絵かき」はまず「真似する」ことから始まっていた。テレビアニメのキャラクター商品、毎月買っていた漫画雑誌、アルバムの中の風景写真、はたまたプリントの端に印刷されたイラストカットまで、自分の「お気に入り」を集めては「模倣する」、「真似する」ということが私にとっての第一歩であり、そうやってそっくりそのまま「真似する」ことで自分の中に技術として取り込むことができたと思っている。そして、なにも私一個人に限った話ではなく、大工にしる教師にしる、何かしら技術を身に付けようとする人間は少なからずどこかで上司や師匠といった先人たちの技を「真似する」「模倣する」ということがあるだろう。その際に、私が大切だと思うことは「目的」を模倣するのではなく、「手段」を模倣し、そこから要領を得ることだと考える。ここで、ふたたび私のことに話を戻すが、先ほど述べたように「お気に入り」を「真似」したその後に私がすることは、そこから自己流のスタイルに変換していくことである。つまり、最初は「お気に入り」を「お手本」としながらそっくりそのまま「真似」をする。次に、何も見ないで自分の思うように描いてみる。もちろん、そこでつまづいたり描き方がわからなくなった時は、「お手本」をもう一度見直して、そのやり方を思い出そうとはするけれど、そっくりそのまま写し取る段階にまでは帰らない。そう

して「何も見ない」状態で「お気に入り」と同じようなものを作ろうとすると、そこには無意識のうちに個人的な「解釈」や「思想」、「好み」といったものが混じってくる。すなわち、それこそが「創造性」というものではないかと、私は考える。つまり「お手本」をいちいち確認したり、上からそっくりそのまままねているうちはたとえそれで成功したとしても、それは自分が評価されている訳ではなく「お手本」がよかったと言われているに過ぎないのだから、喜ぶべき事ではないと私は思う。もちろん絵とは勝手が違って、大工など個人的な「好み」を反映しにくい、あるいは、できない技術や職業もあるが、それでも「模倣する」ことによって成熟していく過程が存在するという点では「絵を描く」と同じであり、その本質は「目的の模倣」により結果を追い求めるのではなく、「手段の模倣」によって技術を身に付けることだと言えるのではないだろうか。まだ右も左も分からない初心者が、身近な経験者や熟練者の行動を見よう見まねで「真似」しようとするのはよくあることだが、大切なのはそこから「自分ひとりで何とかできるようにすること」であり、「技術の模倣」とかその途中経過に過ぎず、技術を身に付けることを目的としてしまっているだけでは、いつまでも「創造性」が作品や結果に反映されることはないだろうと私は思う。】

長い引用になったが、この学生の作文には「守・破・離」の過程が自分なりの自己理解として表現されている。世阿弥の『風姿花伝』（現代語訳、水野肇、PHP）にはこの言葉は直接には出てこない⁸⁾。しかし、能における真似る・物真似の正しい仕方が詳述されている。筆者はこの学生の作文には高い評点を付けた。これ以外にも自分なりの模倣と創造性の相補性を考察している学生が多かった。例えば、「科学における創造という観点から、研究が他人の模倣の上に成立しているだけでなく、自分自身の研究も他人が模倣してくれるに足る成果の提供を求められているということかと思う。」と記述していた（1年男子）。また、『『模倣』という言葉を知ると思わず悪い意味で頭に浮かんでくるのは私だけではないだろう。それは現代の人たちがネットなどの便利なものを使ってどんどん楽な方へと行ってしまったのが原因だと思われる。・・・良い『模倣』

があるとなれば、それはオリジナルな模倣と言える。模倣と創造性は対立しないだろう」（2年男子）と記述していた。

これらの課題レポートからして多くの学生が両者の関係について日頃の感じ方を整理し再構成して記述していると、筆者は評価した。

4. まとめ

著作権については我々は確かな理解をもたなければならぬ。そして、著作権は山田奨治が指摘するように我々を萎縮させるものではない。その真意は、模倣と創造性の相補的な関係を理解することである。清水良典も文芸評論家の立場から次のように述べている。「著作権法とは、必ずしも・・・恐怖感や萎縮を起こさせるものでない。・・・逆に、先人の作品からさまざまな影響を受けながら書いている書き手の権利を守ってくれる法律でもあるのだ」⁹⁾、と述べている。模倣を文化の発展に寄与する方向で理解することが大切である。学生たちの課題レポートにもその理解が一定形成されたことが視われた。

参考文献

第1章

- 1) 小沢一仁, 滝沢 利直 2006 大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究(3) — 学生における「現代社会と人B」の教育効果と自己理解・社会認識との関係 — 東京工芸大学工学部紀要人文・社会編 (Vol. 29 No. 2)
- 2) 三浦展 2006 マイホームレスチャイルド— 下流社会の若者たち — 文藝春秋
- 3) 小沢一仁・大島武・森本倫代 2008 大学における授業のあり方を考える — 「講演型授業」「参加型授業」「教育方法・技術の習得を目指す技術習得型授業」の実践を通して — 東京工芸大学工学部紀要人文・社会編 (Vol. 31 No. 2)
- 4) 小沢一仁 2009 大学の授業において自己理解を目指す文章を書くこと 東京工芸大学工学部紀要人文・社会編 (Vol. 32 No. 2)

第2章

- 1) J. デューイ、松野安男訳：『民主主義と教育』岩波書店、1989、第3章、第4章 参照
- 2) 上田薫：『教師の生き方と授業』明治図書、1982、第一部参照
- 3) 小川三夫：『木のいのち 木のこころ』草思社、1994、p. 152
- 4) 山田奨治：『オリジナリティとは何か 日本文化の模倣と創造』角川選書、2002、pp. 30-31 参照
- 5) 同上、p. 167
- 6) 佐藤学：『教師花伝書』小学館、2009、pp. 36-37
- 7) 山田奨治：『オリジナリティとは何か 日本文化の模倣と創造』p. 226
- 8) 世阿弥著、水野聡訳：『現代訳 風姿花伝』PH Pエディターズ・グループ、2008、参照
- 9) 清水良典：『あらゆる小説は模倣である。』幻灯舎、2012. pp. 37-39 参照